

授業単位としてのハンドボールにおけるゴールキーパーの 学習内容の検討

—学習者から見たゴールキーパーの機能的特性の調査を基に—

山下純平
愛知教育大学

Examination of Learning Contents of Goalkeeper in the class of Handball

—Based on the research into functional attributes of the Goalkeeper
by learner's feeling—

Junpei Yamashita
Aichi University of Education

キーワード：ハンドボールの授業，ゴールキーパー，学習内容

Key words：Class of Handball

Goalkeeper

Learning Contents

1. はじめに

授業におけるハンドボールに関連した単元は、2008年告示の学習指導要領を参照すると、次のように取り扱うことができると考えられる。小学校低学年では「ハンドボール」の語は示されていないが、「中学年から始まるハンドボールを基にしたゲームにつながる簡単な動きを学習するボールゲームと鬼遊び」、中学年では、「ハンドボールを基にした易しいゲーム」、高学年では、「ハンドボールの簡易化されたゲーム」、中学校第1学年、第2学年では「ハンドボールの工夫したゲーム」、第3学年では、「簡易化されたルールの制限を次第に正規に近づけたハンドボールの試合」である。

学習者は、これらのハンドボールの学習を通して「技能」を身につけていく。学習者が身につけるべき「技能」の一つには、「ゴール型の種目に共通する動き」がある。これは、生涯スポーツとして様々なゴール型の種目に適応できるようにするためであると考えられる。よって、重視される「技能」は、ハンドボールの競技特性色の濃い動

きより、ゴール型に共通した動きである攻撃面での「ボールを持たないときの動き」であると考えられる。学習者は、これらの攻撃面を重視した「技能」の学習を行い、中学校第3学年での「簡易化されたルールの制限を次第に正規に近づけたハンドボールの試合」を行うわけである。そこでは、これまでの学習を生かして、「得点が入りやすい」「ゴール前の空間をめぐる攻防」での試合が目指されるべきであると考えられる。

教師は、攻撃面の学習を重視した教材を用いて、授業を展開していくことになる。しかし、試合を行う場合には、防御者であるゴールキーパーを配置する必要がある。学習指導要領には、ゴールキーパーの学習内容及び取り扱いが示されていない。また、これまでのゴールキーパーに関する研究は多く存在するが、競技ハンドボールにおける研究が主であった。授業における研究は、授業実践の報告で「試合の途中でも、キーパーは先生に申し出れば誰に代わってもよい」¹⁾や「狭い角度からのシュートは、ゴールキーパーの体や顔面にあたる可能性が高いため、ゴールエリアラインを直線

にする」²⁾ など方法論が多少言及されている程度であり、学習者の学習成果を報告するような研究は見当たらない。つまり、授業においてゴールキーパーを配置する状況があるにもかかわらず、ゴールキーパーの学習内容及び取り扱いについての資料は、ほとんどないといえる現状である。

以上のことから、今後のハンドボールの授業単元における一課題は、ゴールキーパーを行う学習者の学習を保証するために、攻撃面での学習内容に加えて、ゴールキーパーの学習内容について検討することであると考えられる。

そこで本研究は、ハンドボールの授業単元でゴールキーパーを経験した学習者の学習成果を明らかにするために、森³⁾や鈴木⁴⁾の感想文を解釈する方法を参考に、学習者から見たゴールキーパーの機能的特性^{注1)}を明らかにする調査を試みた。学習者の内的な側面を把握することは、学習効果が高い教材を開発するために必要な基礎的な一資料になると考えた。

2. 研究目的

本研究の目的は、学習者から見たゴールキーパーの機能的特性を調査することと、調査結果を基にゴールキーパーの学習内容について検討し、ハンドボールの新たな教材開発のための一資料を得ることである。

3. 研究方法

3-1 研究対象及び対象授業

研究対象は、ハンドボールの単元に取り組んだN中学校の第2学年244名だった。

対象授業は、平成23年度の10月から12月の間に全12回で行われた。ボールは競技用のボールではなく、授業用に開発された柔らかいボールが使用された。授業では、ゴールキーパーを配置したゲームが行われた。生徒は、ハンドボールの単元をこれまでに経験したことがなく、初めて学習した。

3-2 調査実施日

調査実施日は、平成23年12月16日朝の学習の時間だった。

3-3 調査方法

調査方法は、質問紙によるアンケート調査を行った。本研究では、「ゴールキーパーを経験してみて良かったところ」を質問することで、学習者にとってゴールキーパーの「良かったところ」が「何か」を明らかにした。「良かったところ」には、学習者の「運動有能感」である「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」⁵⁾が含まれると考えられる。つまり、「良かったところ」が「何か」を参考にして学習内容を検討することは、学習者が「運動有能感」を得るために必要な要素を学習内容に含めるために必要であると考えた。

質問は以下の通りである。

「ゴールキーパーを経験してみて良かったところを自由に書いてください」

3-4 分析方法

本研究では、質問の回答を森³⁾や鈴木⁴⁾の方法を参考に「キーワード分析」を行い、KJ法^{6) 7)}を参考にしながら、筆者（ハンドボール研究指導歴9年）の専門的知識と経験を用いた思考による解釈で類型化し分析を行った。「キーワード分析」とは、分析者が特定したキーワードに着目して分析する方法である。本研究のキーワードは、ゴールキーパーの機能的特性と考えられる語である。Zoltanは1993年に国際ハンドボール連盟の「Project Playing Handball」というプロジェクトにより「PLAYING HANDBALL -A COMPREHENSIVE STUDY OF THE GAME-」という400ページにも及ぶ詳細なマニュアルを作成した。このマニュアルは、包括的なハンドボールゲームの研究の成果として位置付けられ、先進の選手になろうとする初心者プレイヤーをターゲットに、ハンドボールの背景から、技術と戦術、各年代におけるコーチングに至るまで、それぞれが詳細に示されている⁸⁾。つまり、この文献に示されているゴールキーパーの機能的特性は、国際的に一般的であると考えられているものである。この文献でゴールキーパーの機能的特性は、「防御活動における戦術的義務」「攻撃活動における戦術的義務」「個人要素」「チームに対する影響」という4つの観点から述べられている。

「防御活動における戦術的義務」は、「ゴールを

守ることで得点を防ぐこと」が主となる義務として示されている。その他の義務としては、「防衛者の中で最高の視野を確保できる」という特性から「防衛者に指示を出すこと」と示されている。

「攻撃活動における戦術的義務」は、「速攻の始まり」のポジションという特性から「最も有利なポジションにいるフリーの仲間に素早いショートパスまたはロングパスを行うこと」と示されている。また、「ゲーム中にゴールキーパーは、ゴールエリアから離れなければならない、コートプレイヤーとして攻撃に参加する状況がよく起こる」という特性から、「コートプレイヤーの単純な攻撃要素を得る必要がある」と示されている。

「個人要素」は、ゴールキーパーに必要である特別な特徴として、「平均より高い身長、特に優れた柔軟性、優れた反射、精神的強さ、勇気、自信、決断力、意志力、位置を認知する能力、セービングしようとする気持ち」と示されている。

「チームに対する影響」は、「ゴールキーパーは、結果の情勢を決定することができ、試合の成り行きを決着づけることができる」「チームのプレイ、自信そして全体の成果に著しく影響を与えることができる」「攻撃者の前に立ちただかる最終防衛者なので、チームの中で最も重大な責任を負う」と示されている。

本研究で抽出するキーワードは、上記の4つの観点に関する語とした。また、本研究では学習者から見たゴールキーパーの機能的特性を明らかにするため、4つの観点に該当しない語に関しても抽出し、考察の対象とした。

本研究における手続きは以下の通りである。

- ① 「キーワード」を抽出する。一回答の中には、複数の「キーワード」が存在する場合がある。
- ② 抽出した「キーワード」を類型化し、「キーワード群」とする。この「キーワード群」が本研究における学習者から見たゴールキーパーの機能的特性である。
- ③ 「キーワード群」をZoltanの4つの観点を参考に考察する。

4. 結果及び考察

4-1 ゴールキーパー経験者の総数について

質問紙の回収率は、欠席者がいたため224名/244名(約92%)だった。224名のうちゴールキーパー未経験が25名、そして、2名の解読不能回答があった。よって、有効回答の中でゴールキーパー経験者の総数は197名だった。

4-2 ゴールキーパーの学習内容の検討

抽出した「キーワード」を類型化した「キーワード群」及び「キーワード群」をZoltanの4つの観点を参考にして分類した結果を表1に示した。

表1 分類結果

対象	件数	キーワード群
防衛活動における戦術的義務	91	シュートの阻止
		手以外の部位での阻止
		シュートに応じた阻止
		シュートコースの予測
防衛活動における戦術的義務	19	阻止方法の理解
		阻止し辛いシュートコースの理解
		ゴールキーパーのルールの理解
		指示すること
攻撃活動における戦術的義務	4	声をかけること
		アドバイスのしやすさの理解
		指示のしやすさの理解
		速攻すること
ゴールキーパーの特性	71	阻止後のパス
		速くへのパス
		筋力力の向上
		反射神経の向上
ゴールキーパーの特性	44	集中力の向上
		手動力の向上
		ボールへの適応力の向上
		挑戦
ゴールキーパーの特性	33	怖さの克服
		ゴールキーパーの大きさの理解
		相手の動きの観察のしやすさの理解
		味方の動きの観察のしやすさの理解
その他	15	全体の動きの観察のしやすさの理解
		悪い所、良い所の観察のしやすさの理解
		チームへの貢献
		感謝されること
その他	15	重大な責任
		難しくない
		難しい
		いろんなことがわかった
その他	15	楽しかった
		楽しかった
		楽しかった
		なし

「キーワード群」の分類結果は、「ゴールを守る」「指示」「速攻」「個人要素」「周りが見やすい」「チームへの影響」だった。これらをZoltanの4つの観点对応させると、「ゴールを守る」「指示」は、「防衛活動における戦術的義務」に対応する。「速攻」は、「攻撃活動における戦術的義務」に対応する。そして「個人要素」「周りが見やすい」及び「チームへの影響」は、ゴールキーパーの特性に対応する。

以上のことから、本研究でのゴールキーパーについての学習内容は、「戦術的義務」を達成するための「技能」、「知識、思考・判断」及び「態度」をゴールキーパーの特性を考慮して検討すべきであると考えられる。

4-2-1 ゴールキーパーの特性に関する言及について

「個人要素」については、約36% (71件／197名) の学習者が言及していた。「キーワード群」は、「瞬発力の向上」「反射神経の向上」「集中力の向上」「予測力の向上」「ボールへの適応力の向上」「挑戦」「怖さの克服」「ゴールキーパーの大変さの理解」だった。これらの中で体力要素に関しては、高めることができる「知識」として学習内容に含めることができる。精神面についての言及に関しては、「態度」として学習内容に含めることができると考えられる。

「周りが見やすい」については、約22% (44件／197名) の学習者が言及していた。「キーワード群」は、「相手の動きの観察のしやすさの理解」「味方の動きの観察のしやすさの理解」「全体の動きの観察のしやすさの理解」「悪い所、良い所の観察のしやすさの理解」だった。これらは、「思考・判断」として学習内容に含めることができると考えられる。

「チームへの影響」については、約17% (33件／197名) の学習者が言及していた。「キーワード群」は、「チームへの貢献」「感謝されること」「重大な責任」だった。これらは、「態度」として学習内容に含めることができると考えられる。

4-2-2 「防御活動における戦術的義務」の学習内容について

「ゴールを守る」ことについては、約46% (91件／197名) の学習者が言及していた。「キーワード群」は、「シュートの阻止」「手以外の部位での阻止」「シュートに応じた阻止」「シュートコースの予測」「阻止方法の理解」「阻止し辛いシュートコースの理解」「ゴールキーパーのルールの理解」だった。

この結果から「ゴールを守る」ことに関する学習課題は、「シュートを阻止することができるようになること」であると考えられる。この課題を学習者が「知識、思考・判断」である「阻止方法」や「シュートコースの予測」などに気づき理解することでその「技能」を高めることが含まれることが望ましいと考えられる。また、「態度」についての学習内容には、「怖さの克服」や「挑戦」

ということから、「積極的にシュートを阻止すること」、「重大な責任」と感じていることから、「シュートを阻止できなかった学習者に対して声をかけてあげること」が含まれることが望ましいと考えられる。

「指示」については、10% (19件／197名) の学習者が言及していた。「キーワード群」は、「指示すること」「声をかけること」「アドバイスのしやすさの理解」「指示のしやすさの理解」だった。

この結果から「指示」に関する学習課題は、「指示ができるようになること」であると考えられる。また、「思考・判断」についての学習内容は、「周りが見やすい」という特性に気づき理解すること、「全体をよく観察すること」が「指示」を出すためのポイントとなることが含まれることが望ましいと考えられる。「態度」についての学習内容には、「チームへの貢献」「感謝されること」ということから「積極的に指示をしていること」や「仲間のために声かけやアドバイスをすること」が含まれることが望ましいと考えられる。

4-2-3 「攻撃活動における戦術的義務」の学習内容について

「速攻」については、約2% (4件／197名) の学習者が言及していた。「キーワード群」は、「速攻すること」「阻止後のパス」「遠くへのパス」だった。

この結果から「速攻」に関する学習課題は、「阻止した後に効果的なショートパス、ロングパスができること」であると考えられる。また、「思考・判断」についての学習内容は、「周りが見やすい」という特性に気づき理解することで、「全体をよく観察すること」が味方への「効果的なショートパス、ロングパス」を行うためのポイントとなることが含まれることが望ましいと考えられる。「態度」の学習内容は、「積極的に攻撃活動に参加すること」とすることが望ましいと考えられる。

4-2-4 言及されなかったゴールキーパーの機能的特性について

本研究で学習者が言及していたことは、Zoltanが述べているゴールキーパーの機能的特性を概ね満たしていた。しかし、言及されなかったゴールキーパーの機能的特性があったため、ここでは学習の可能性を提案するために考察を行った。

「指示」に関しては、すべて「指示」という行為そのものが良かったという回答であり、具体的な指示内容に対して言及している学習者はいなかった。Zoltanは、「指示」に関する戦術的義務を「防御者に指示すること」と述べている。よって、学習内容は、「知識」である指示すべき内容を具体的に提示することで、さらに学習効果の高いものになると考えられる。

「攻撃活動における戦術的義務」に関する回答の中には、Zoltanが述べている「ゲーム中にゴールキーパーは、ゴールエリアから離れなければならない、コートプレイヤーとして攻撃に参加する状況がよく起こる」ということに対する言及がなかった。このことから学習者は、ゴールキーパーをゴールエリアから離れることをしない防御専門のプレイヤーであると認識してしまっている可能性があるということ。または、ゴールエリアを離れて攻撃したことに対する「有能感」を得なかったということが示唆される。ハンドボールのルールでは、ゴールキーパーがゴールエリアを離れた場合は、コートプレイヤーとしてプレイすることができる。つまり、ゴールキーパーがゴールエリアを離れた場合、コートプレイヤーは数的優位な状況になることができるため、攻撃を有利に進めることができる。以上のことから「時にコートプレイヤーとして攻撃に参加することができるようになること」と設定することで、さらにゴールキーパーとしての学習の可能性が高まると考えられる。

5. まとめ

本研究では、学習者から見たゴールキーパーの機能的特性の調査を基にゴールキーパーの学習内容について検討した。以下に検討した学習内容を上位課題である学習課題、下位課題である「技能」、「知識、思考・判断」、「態度」それぞれの学習課題に分けて示す。また、学習の可能性についても以下に示す。

① 上位課題である学習課題

- 「シュートを阻止することができるようになること」
- 「指示ができるようになること」

「阻止した後に効果的なシュートパス、ロングパスができるようになること」

② 下位課題である学習課題

・「技能」についての学習課題

「手だけでなくからだ全体を使ってシュートを阻止すること」

「マークされていない仲間にシュートパス、ロングパスをすること」

・「知識、思考・判断」についての学習課題

「高められる体力を理解すること」

「ゴールキーパーのルールを理解すること」

「シュートコースを予測すること」

「周りが見やすいことに気づくこと」

・「態度」についての学習課題

「積極的にゴールの阻止、指示、攻撃活動を行うこと」

「シュートを阻止できなかった仲間に対して声かけをすること」

「仲間のためにアドバイスや声かけをすること」

③ 学習の可能性として

「指示内容についての知識を理解すること」

「時にコートプレイヤーとして攻撃に参加することができるようになること」

本研究を行ったことで以上のようなハンドボールの新たな教材開発の一資料を得ることができた。これまでにこのような資料がなかったことから、今後はこの資料を参考にゴールキーパーを配置する教材を開発し、実践研究を行うことでその効果を明らかにしていきたい。ただし、教材を開発する際に、ゴールキーパーは防御者であり、「技能」で重視することは攻撃であることを第一に考える必要があると考えられる。よって、本研究で検討した学習内容を含めた、ゴールキーパーが攻撃できるような教材やゴールキーパーの「知識、思考・判断」、「態度」面の充実を図った教材を開発していくことが望ましいのではないかと考える。学習者が「運動有能感」を得られるような教材開発を目指したい。

【注及び引用・参考文献】

- 注1) 本研究における「ゴールキーパーの機能的特性」で使用している「機能的特性」と体育科教育学で一般的に言われている「機能的特性」は、同義ではない。本研究における「ゴールキーパーの機能的特性」は、「ゴールキーパーにおける相互に関連し合って全体を構成している各要素の特性」という意味である。本研究では、「良かったところ」について質問している。また、「学習者から見た」という語を付けることで、「学習者が感じる、運動に含まれる内在的楽しさ」という意味になる。
- 1) 岡田明裕：生徒指導を生かしたハンドボール指導―誰でも楽しんでハンドボールを実践する工夫―。ハンドボール研究第12号：53頁―57頁，2010
- 2) 渡邊和弘，細田和也：明快，カラーハンドボール（その2）。ハンドボール研究12号：62頁―64頁，2010
- 3) 森勇示：感想文の解釈による体育の授業分析。体育科教育学研究16巻2号，1999
- 4) 鈴木一成：小学校体育における授業改善の試行―4年生表現運動の授業から―。愛知教育大学研究紀要34巻：1頁 - 11頁，2009
- 5) 高橋健夫，岡出美則，友添秀則ほか：新版体育科教育学入門，110頁―116頁，大修館書店，2010
- 6) 川喜田二郎：発想法85版，中公新書，2009
- 7) 川喜田二郎：続・発想法55版，中公新書，2004
- 8) Zoltan Marczinka：PLAYING HANDBALL -A COMPREHENSIVE STUDY OF THE GAME-，200頁―217頁，242頁―244頁，321頁―323頁，Trio Budapest Publishing Company，Hungary，1993
- 9) 文部科学省：小学校学習指導要領解説体育，文部科学省公式ホームページ，Accessed 2011
- 10) 文部科学省：中学校学習指導要領解説保健体育，文部科学省公式ホームページ，Accessed 2011
- 11) 増島みどり：ゴールキーパー論，59頁―84頁，講談社現代新書，2001